

力としての病

—梶井基次郎の作品に於ける肺結核—

Stephen Dodd

作家・梶井基次郎（1901-32）は、肺結核によって夭折したので、その残した作品は、優れた短編20篇といくつかの未完成作品だけです。彼はすでに生前より、同時代の作家たちから認められており、実際、小林秀雄（1902-1983）のような著名文芸評論家が1932年、ある記事で梶井の仕事について言及していることは、彼が文壇のメンバーとして注目するに値する若手作家であったことを示しています。梶井の最後の作品『のんきな患者』（1932年1月）の一流誌『中央公論』における発表は、読者に対する自信を感じさせるものですが、彼の作品が広く読まれるようになったのは、第二次世界大戦後のことでした。今日、日本人が最も親しんでいる梶井作品は、高校の教科書などで取り上げられている『檸檬』でしょう。『檸檬』は、梶井の初出版作品で、その詩的散文体、まるで脅迫観念に取り付かれているかのような細部描写、興味深い話の筋などによって、梶井の名声を確立しました。日本国内では、梶井作品の研究は、批評なども含めてかなりなされていますが、海外ではそれほどではありません。完成作の数などから、近代日本文学史ではマイナーな作家とされながらも、彼の文学への取り組み方法は、彼が作家として活動した時代—1925年から1932年まで—の騒然とした文化の変容の渦中において、独特のものであり、彼の作品と時代の結びつきを考える研究方法は様々あります。今回の発表では、作品のほとんどに浸透している病への感応と、差し迫った死への予期に焦点を当てて、彼の作品を見ていきたいと思っています。

ヨーロッパと同じように、日本においても、肺結核は何世紀にも渡って蔓延

しましたが、工業社会となるに従って患者数は増えていきました。特にその初期において、肺結核患者は、劣悪な労働条件によって生まれ、その死亡者数は1918年にピークに達しました。梶井は、比較的裕福な家庭で育ちましたが—彼の父親は船舶会社で働いていました—東洋のマンチェスターとして知られた、大阪の工業都市で幼年時代のほとんどを過ごし、肺結核に悩まされることとなりました。この疾患は、彼以外の家族にも影響を及ぼしました。弟2人と妹1人が肺結核で亡くなっており、兄は肺の手術を受けています。1913年に肺結核に関連した症状で亡くなった彼の祖母が、すべての孫達にその病を感染させたと考えられています。梶井が17歳の時に、最初の兆候が現れましたが、回復したかのように見受けられました。1919年、梶井は京都の名門第三高等学校に入りますが、翌1920年、肺の炎症により休学を余儀なくされます。しかしながら、彼は東京大学の入学試験に向けて努力して合格し、1924年春より通い始めます。けれども、病状がさらに深刻になったので、学業を半ばであきらめなくてはならなくなりました。1926年の大晦日、彼は伊豆半島の湯ヶ島温泉に短期静養のため出かけますが、そこに1年4ヶ月滞在することになり、結局大学での勉強を終了することはできませんでした。そのようにして強いられた孤立は、作品の執筆に集中するために理想的な環境を彼に与えましたが、耐え難い孤独感と、文壇の中心地に身を置きたいという願望から、梶井は1928年4月、東京に戻りました。しかし、同年9月、病状が悪化して大阪の実家に戻ることを余儀なくされ、戻った後は、母親が彼を看病しました。梶井は1932年3月に亡くなるまで執筆を続けました。

作家というものは、多かれ少なかれ個人的な経験により作品を創り上げるものですが、その健康状態さえ、作品形成にかかわるものなのです。梶井の、自身の病を文学的表現とした仕事を位置付けるのには、マイケル・ブルダグスが島崎藤村について述べた、明治後期の肺結核と隔離所に関する興味深い考察が有効です。

ブルダグスは、日露戦争の戦場における死亡者数は、兵士に対する衛生およ

び身体に関する教育、また、隔離を通じた健康管理により、減少したと述べています。科学的にも、隔離は理にかなったものですが、それはまた日本人が「のけ者」や「社会の危険人物」をどのように扱ったかということのメタファーとしても理解されます。例えば、島崎藤村（1872-1943）の『破戒』（1906）では、肺結核は、主人公の小学校教師・瀬川丑松が敬愛する、部落出身の思想家・猪子蓮太郎との関連で登場し、国家から排除、隔離すべき病気として扱われています。丑松の部落民という立場は、物語の大詰めまで学校の人達に隠されています。ブルダグスは、皮肉にも、自分の身分が明らかになった時丑松が日本を捨ててテキサスに行こうとした行為は、まさに彼の日本への忠節と受け取れると述べています。日本から自らを「隔離」という彼の決心は、街を健康な状態にし、ひいては日本の社会を「病気」の伝染から守るのです。

梶井が創作を始めたのは『破戒』から20年後のことですが、時代上の共通点は多くあります。肺結核の有害性は社会に浸透し続けていました。柳田国男（1875-1962）は、明治・大正を通し、絶えがたい孤独から自殺した肺結核患者が後を絶たなかったと述べています。それゆえ、梶井の作品にしばしば肺結核患者の問題が登場するのは驚くに値しません。たとえば、『のんきな患者』に肺結核に侵された雑貨屋の娘の話が出てきます。その娘の母親は、できるだけ看病をしますが、残りの家族は、彼女を2階の一間に放置します。『のんきな患者』には次のように記述されています—「その親爺さんも息子もそしてまだ来て間のない息子の嫁も誰もその病人には寄りつかないようにしている。」梶井の個人史から見ても、温泉への蟄居は、「健康な」社会からの要求への屈服とも受け取れ、丑松のように、自身の隔離は彼の国家への忠節を明らかにしていると言えるかもしれません。

このような例は、梶井が疑いなく肺結核患者の社会的孤立について承知していたことを示しています。他方、彼の作品には、病気をポジティブに捉えている部分もあると言えるかもしれません。ことに、「経験の共有」といえるようなものの中にそれが表現されているように思われます。例えば、一見して梶井

の湯ヶ島滞在は、文壇の中心たる東京からの隔離ととれます。実際、その時期の経験をもとにした『冬の蠅』（1928）で、梶井は、主人公の部屋に住む蠅の生態を細部に渡って一飛び方のパターンから、牛乳瓶に登る姿やその死まで一描写していますが、そのことによって、いかに時が重苦しく過ぎていっているかを表現しています。結局、その若者にとって退屈は耐えがたいものとなり、ほんの気まぐれから、彼は下田へ逃避旅行し、地元の売春宿を訪れます。3日後、「荒々しく粗雑」な海の景色にうんざりした彼は、もとの村、「山や溪が聞きあい心を休める余裕や安らかな望みのない私の村の風景がいつか私の身についてしまっている」場所へ戻ることを心待ちにします。諦念を感じさせながらも、これらの言葉は、彼の、病気に対する不安と戦う場所としての湯ヶ島の重要性を示しているように思われます。

実際、この村は、梶井がほのめかした以上に、彼に慰めを与えていたようです。梶井が1926年の終わりに湯ヶ島温泉に滞在することを決めたのは、決して無計画なことではなかったのです。彼は、尊敬している川端康成（1899-1972）がそこに長期逗留していることを知っていました。二人は、川端が翌年4月にそこを去るまで、互いの作品を読み合い、親交を温めました。梶井は、川端の名声を高めた『伊豆の踊り子』（1926）の校正刷りを集めさえしていました。その他、温泉が結んだ縁としては、1927年夏の、三好達治（1900-1964）、萩原朔太郎（1886-1942）、尾崎士郎（1898-1964）などとの交流が挙げられます。つまり、温泉は、肺結核患者としての梶井のサナトリウムであっただけでなく、東京に限定されない文学者たちのサロンとしての役割も果たし、それは、梶井に他の文学者たちと考えを分かち合い、その仕事に刺激を与える非常に貴重な機会となったのです。

梶井の他にも、樋口一葉（1872-1896）、正岡子規（1867-1902）、国木田独歩（1871-1908）、森鷗外（1862-1922）など、病とは切り離せない近代文学作家は多くいます。実際、肺結核に対する文学的アプローチは一定しておらず、むしろ、移り変わっています。同じ明治時代でも、子規は『病床六尺』（1902）

において、自らの人生の耐えがたい最後の4か月について、冷静に書いており、対照的に、徳富蘆花（1868-1927）の「ほととぎす」（1900）は、アッパーミドルクラスにおいての肺結核にロマンティックな印象を与えています。蘆花が文学的に解釈した肺結核は、明らかに読者の経験に適合していました。この作品は、肺結核患者が減少し、人々の生命をおびやかさなくなる1950年代までベストセラーであり続けました。梶井に関する限り、肺結核が充分文学のテーマになりうると知った上で、執筆をしていたのです。

梶井の、経験の共有としての病の描写は、彼の作品が生み出された背景にも直結していました。公的には、梶井が執筆を始めたのは、肺結核患者が同情的に見られるようになった1920年代半ばで、特に、彼の作品の読者である、新中産階級の都市生活者たちは、患者に対して同情的な意識を持つようになっていました。こうした変化は、正岡子規や他の明治知識人たちによる、理想化しない病の表現によって一部形作られたともいえるかもしれません。他方、そうした見方の変化は、1920年代、進歩的な都市知識人と田舎の保守派の観念的な境界線を強調しました。梶井の教育はまさに前者、都市知識人として彼を位置付けました。

文学史上の流れで見てゆくなら、梶井は、「自己主張」を称揚する白樺派によって体现された、個々人の内面を追及する大正作家の世代に連なります。こうした流れから、肺結核は道徳的過失のメタファーから、個人的主観を働かせることによる内面の追求に変化させる手段となっていきます。梶井の同時代人、横光利一（1898-1947）は、ブルジョアたる自己を、実験的なモダニストの手法によって打破しようとしたが、横光が、胸を病んだ若き妻を看病した経験に基づいて書いた『春は馬車に乗って』（1926）に対する、熱狂的な反響は、それが保守的な道徳的語調を帯びていなかったからでしょう。その代わりに、差し迫る別れに直面した、2人の現代人の関係に焦点を当てることに成功しているのです。つまり、梶井や同時代の作家のテーマとしての肺結核は、彼らの世代に適合した内省として、一般化されているのです。

梶井の病気と政治状況にもつながりがあります。明治後期、保守派の人々は急進的な政治の有害性を説くために、衛生学の考えを利用しました。いわゆる病原菌理論は、非衛生的な社会状況よりも、病原菌の方を病の元としました。衛生学は、政治的介入を通して貧困を根本的に変容させようという社会主義運動に対する、解毒剤とされたわけです。肺結核と政治的転覆の関係は、1910年の大逆事件においての2人—両人とも肺結核を患っていました—幸徳秋水（1871-1911）と菅野蒼子（1881-1911）の処刑によって体现されています。このつながりは、自身も肺結核によって命を落とした詩人、石川啄木（1886-1912）によって、文学的に表現されています。「少なくとも自分は、この2人の左派のヒーローたちと同じ病を被っている。」といささか自虐的な表現ではありますが。

梶井が成人した時も、肺結核が国家に対して観念的に危険であるという状態は続いており、彼は、石川啄木のように、急進的な政治への本能的共感を募らせていきました。1923年の関東大震災時、無政府主義者・大杉栄（1885-1923）が憲兵隊によって殺害される事件が起こったのは、梶井がまだ第三高等学校生だった頃でしたが、この事件は、梶井とその友人達に大杉の思想への共感を引き起こしました。震災後顕著になってきたプロレタリア文学と梶井の作品は、同一視できませんが、梶井は確かに時代への反逆心を持ち合わせていました。大阪での晩年、彼は病床においてマルクスの『資本論』を熱狂的な調子で読んでおり、最後の作品『のんきな患者』では、病に侵された大阪の一般市民の辛い生活を描写することによって、肺結核と社会状況を結びつけています。

マルクスとクロポトキンは1920年頃から大学生たちの間で広く読まれていたので、梶井の興味は、単に時代の流行を反映しているに過ぎないかもしれません。しかしながら、政治的なことは彼の作品に現れていないとはいえ、梶井は、自らの肺結核によって、大正初期世代の個人主義的懸念から発した、反逆の風潮を広めているのです。スーザン・ソントグの有名な論文『メタファーとしての病』は、肺結核と癌の文化的重要性について、西洋的見地から取り組んでい

ますが、その観察は、梶井の文学上の表現を見抜いています。たとえば、彼女は、肺結核がいかにボヘミアンの生活のモデルとなっているか、以下のように言及しています。「肺結核にかかることは、脱落であり、健康な場所を見付けるために終わりなき探索をする、さすらい人となることである。19世紀になると、肺結核は亡命のため、そして、漂泊し続けるための新たな理由となったのである。」ソングは、病気をきっかけに暖かい地中海地域に旅をした北ヨーロッパの作家や芸術家を念頭においているのですが、同じような衝動が（たとえば行動範囲の規模が小さいにしても）、梶井作品の主人公達にも見受けられます。たとえば、『檸檬』には、不明確な「えたいの知れない不吉な魂」に突き動かされて、「始終街から街を放浪し続ける」「脱落した」京都の学生が出てきます。この学生の健康状態は、「彼の手はいつも友人達の手よりも熱かった。」という間接的な表現によって表されているだけです。しかし、この作品から力強く現れてくるのは、熱に浮かされたような不安です。こうした心のありようは、実は、決して新しいものではありません。震災前の大正小説は、一般的に、都会の若者たちの、漠然とした不安と無気力、「神経衰弱」という曖昧な用語に要約される倦怠感を描写していました。小林秀雄は、『檸檬』に、こうした小説にありがちな「頹廢」感がないことを指摘していますが、梶井の特別な状態を、広い文化的感性から理解すれば、この医学用語もどきの言葉も、梶井作品研究に対して未だ有効かもしれません。

その初期の作品が「神経衰弱」と見なされた佐藤春夫（1892-1964）作品に、梶井は興奮しました。佐藤の『殉情詩集』（1921）に感銘を受けた梶井は、この詩集を何冊も購入し、友人に配りました。梶井は『都会の憂鬱』の愛読者でもありました。梶井は、この小説の主人公・尾澤一怠惰な、芸術家気質の、無職である25歳の若い男。無情な都市を彷徨い、常に孤独な黙想にふけっている一に自らを重ね合わせていたのかもしれません。物語の途中で、尾澤の結婚は破綻を来し、彼は、自分が妻と田舎に住んでいた昔を懐かしく思い出します。当時、庭には、彼の前向きな夢を象徴的に体現しているかのように、美しい薔

薇が咲き誇っていたのでした。

実際、佐藤の先行作品『田園の憂鬱』（1919）を読んだ誰もが、両作品の語り手に等しくノスタルジックな空想癖があることに気付くことでしょう。両作品のタイトルに使われている「憂鬱」という言葉は、「神経衰弱」文学における特徴としてのメランコリーの重要性を強調しています。ソングは憂鬱と肺結核を、創造力の源として結びつけており、そのことから、なぜ梶井が佐藤の作品を気に入ったのか、理解することができます。ソングは、肺結核は「憂鬱」—4気質分類によると、芸術家の病—と直接結びつくとしています。憂鬱質—あるいは結核患者—は、繊細、創造的、特異などの特徴を持つ優秀な気質なのです。

佐藤自身は結核患者ではありませんでしたが、彼は、この「芸術家の病」の優れた面を持ち合わせていました。実際、『風流論』（1924）で、佐藤は日本人の特徴は、繊細さにあると述べ、「沈黙と虚無」の境地に、芸術や文学的な実践を通して表現されるとしています。梶井は、まだ京都の学生であったころから、彼を「特異なものとする」何かをやりたいと熱望していましたが、そうした願いは、自身の健康状態によっていっそう強くなりました。1920年、肺の炎症により、何もできなくなりましたが、皮肉なことに、彼に創造の道筋を与えてくれたのは、その肺結核だったのです。同年、彼は、肺病はロマンティックな文学青年と結びついているから、かかってもいいのだと友人たちに語っています。

つまり、梶井の肺結核は、確かに彼を隔離状態にしましたが、それが全く報われなかったわけではなかったのです。湯ヶ島における長期逗留が示しているように、肺結核により、いわゆる「健康な」社会から離され、参加したいと熱望していた東京の文壇からも除外される形になったのは本当です。しかし、彼は、肺結核を恥と思うよりも、それをインスピレーションの源とすることが可能なことにも気付いたのです。それは、彼を他の数多の作家たちから際立たせることともなりました。『檸檬』において、主人公である若者が、自らの体か

ら発している熱を「見せびらかす」ため、友達の手を握るのと同じことです。詩人の三好達治は、1926年、東京で梶井と同じ下宿に住んでいた時起こった事について、次のように想起しています。ある夜、梶井は、赤ワインのようなもので7割方満たされたグラスを電灯にキラキラさせながら彼に見せました。そのように美しく披露された「ワイン」が、実は、肺から噴出したばかりの梶井の血だと三好が気付くまでにしばらくかかりました。この事件は、ボードレールのような悪意に満ちたユーモアと共に、梶井が、自らの病の中に存在する力に気付いていたことを示しています。そのようにして梶井は、国家が暗く重苦しい時代に入っていく中、近代日本の恐らく「健康」であろう部分に、批評的な光を投げかけることができたのでした。

* 討議要旨

江口季好氏は、かつて三好達治氏と何度か雑談する機会があったが、そのたびに「乳母車」を梶井が褒めてくれたので僕は詩人になった。梶井が「乳母車」を褒めてくれなかったら僕は詩人とは無関係な人物となっていた、というようなことを3回くらい聞かされた。梶井に結核を通した1つの成長があったとしても、彼の批評眼・文芸観の成熟が結核とは無関係なところで形成されていたのではないか、と述べた。

柴田勝二氏は、自分の中の結核を1つの方法的な武器とすることによって自分を取り囲んでいる社会の病・文化の病を異化し相対化していく戦略性があったのではないかと述べた。

鶴崎裕雄氏は、「力としての病」という話で結核が中心だったが、他にもいくつか病気があつた。その中で精神の病などではなく結核だからこういうふうな小説・文学の力になっていくのだろうか、と尋ね、発表者は、結核に集中したのは、日本の結核は1918年がピークだが、結核患者に芸術家・作家がかなりいたため、ただの病気ではなく譬喩化されるようになった。このような考え方が西洋から来たかどうかは分からないが、関係があると思う、と答えた。

マイケル・ボーダッシュ氏は、結核に罹患する原因は細菌によるが、この時代にはまだ遺伝説・環境説などがあつた。梶井自身は自分の病気をどう解釈しているか、と尋ね、発表者は、梶井の家族も何人か結核で死亡しており、家族の歴史と当時の社会状況から梶井は子供の頃から結核で死ぬ可能性を意識し「しょうがない」と考えていた、と答えた。